

26. 黒毛和種繁殖雌牛の過肥防止を目的とした哺乳が分娩後の栄養代謝状態と繁殖性に及ぼす影響

畜産フィールド科学センター 木田 克弥

メールアドレス kidak@obihiro.ac.jp

研究の概要

【目的】

繁殖雌牛の過肥は、発情周期の異常により受胎率を低下させる。哺乳は分娩後の卵巢機能回復遅延の要因といわれているが、過肥に対しては好影響も期待できる。そこで哺乳が分娩後の栄養代謝状態および繁殖性に及ぼす影響を解析し、過肥の繁殖雌牛に対する有効性を検討した。

【方法】

2006年6月末に分娩した過肥ぎみの黒毛和種繁殖雌牛（試験開始時の平均ボディコンディションスコア4.25）7頭を哺育群（4頭、哺育期間5ヶ月間）、非哺育群（3頭）に分類した。分娩週（0週）から9週目まで体重測定と採血を行い、プロジェステロン、栄養代謝因子を測定した。10月にオブシンク法による人工授精を行った。

【結果】

非哺育群の体重は試験期間中増加したが（ $P < 0.05$ ）、哺育群では体重に変化がみられなかった。非哺育群は哺育群に比べて、分娩後2週目の血糖値が高く（ $P < 0.05$ ）、分娩後1~2週目の血中NEFA濃度が低い傾向がみられた（ $P < 0.1$ ）。しかし、これらの違いは分娩後日数の経過とともにみられなくなった。血中インスリン濃度は試験期間中、非哺育群が哺育群に比べて高く推移した（ $P < 0.05$ ）。分娩後9週目までに正常な卵巢周期が再開した牛は、非哺育群で全頭、哺育群で4頭中2頭であり、再開したタイミングは非哺育群が早かった。しかし、オブシンク後の初回AIでの受胎頭数は、非哺育群が0頭だったことに対し、哺育群は3頭だった。以上のことから、黒毛和種繁殖雌牛に哺育させることは、分娩後の体重増加を軽減させ、正常な卵巢周期再開が遅れるけれども、受胎には問題がないことが示された。

